Changes in Journal of the Juzen Medical Society

| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-12-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/47867 |

# 十全医学会雑誌の今昔

## Changes in Journal of the Juzen Medical Society

井　関　尚　一

本年3月をもって金沢大学を定年退職しました．これまで教授を約27年間，また十全医学会雑誌の編集委員を10年間，編集委員長を昨年暮れまで9年間務めましたので，この間の十全医学会雑誌 (以下，本誌) の変化について私の思うところを述べます．

本誌は，第四高等学校医学部十全会雑誌第1号 (明治29年11月25日発行) に端を発する120年もの歴史を持っています．戦前の本誌の中身を詳しく見たわけではないのですが，戦前には本来の意味での学会誌として，学位論文のみならず教員研究者による原著論文が多数掲載されていました．当時も日本学士院発行のProceeding of the Japan Academyをはじめとするいくつかの外国語による学術雑誌はありましたし，本誌でも英文や独語文による論文も掲載されてはいましたが，今日のように英文でなければ原著論文にあらずという風潮はまだなかったと思います．私が編集委員になった平成10年頃までには，すでに研究者による原著論文は英文で，できる限りimpact factorの高い海外学術誌に載せることは確立されていましたが，学位論文については和文で本誌に載せることが圧倒的に多く，本誌は毎号，学位のための原著論文で厚さ1 cm近くにもなり，編集委員は常に査読でフル回転だったことを思い出します．それがその後急速に減少し，私が編集委員長になった平成20年頃は毎号数編ほどになり，現在ではかつての年6回発行が3回発行になっても毎号１編あるかないかという状況です．この間，学位論文は英文の海外誌に限るという制度変更があったわけではないので，本誌に載る学位論文の激減の理由は，次のようなものでしょう．1) 学位論文の数，特に論文博士 (乙論) の数が減った．かつて医学博士号は医学部卒業者の大部分が取得するものであり，オリジナル論文としての価値には目をつぶっても大量の学位を出すことが医局に求められていたのですが，近年，学位は原則として課程博士のみになり，学位など取らなくても構わないという風潮と相まって，学位論文により大きな付加価値が必要になったということでしょう．もうひとつ，より大きな理由として，2) 学術雑誌への二重投稿の規制が厳しくなったことが挙げられます．かつては学位論文をとりあえず和文で書いて本誌に掲載し，ほぼ同じ内容を英文で書いて，同時もしくは事後に海外学術誌に投稿するということがごく当たり前に行われていましたので，学位取得者にとっては特に肩身の狭い思いをすることなく，締め切りや査読において有利な本誌を学位に利用することができました．しかしそれができなくなった現在，オリジナルの研究成果を1箇所にしか出せないのなら，英文で書いてimpact factorのつく海外誌に載せたいと当然思うでしょうし，指導教員にとっても，指導した学位論文が共著で海外誌に掲載されて自分の業績になることを望むのは無理からぬことです．

私は本誌における原著論文の減少はやむを得ないと思いますが，学位論文が現在のように共著の英文論文１編だけでよいというのはいささか疑問に思っています．本誌に掲載された学位論文は和文であっても単著である以上，本人が主になって書いたことが明白ですが，共著の英文論文では率直に言って指導教員が大幅に執筆に関与することが多いのではないでしょうか．本誌に和文の学位論文を書くことにより，学位取得者は指導教員のみならず査読者の丁寧な指導を受けて論文の書き方のトレーニングを行うことができました．本誌の査読作業はcriticismというより教育指導の一環であると言われた所以です．望ましい学位論文とは，大学院在学中に複数の原著論文 (最低ひとつは筆頭著者) を学術雑誌に出したうえで，最後にこれらの内容を本人が和文もしくは英文でまとめた単著の総説をthesisとして学位審査に付すというものでしょう．このthesisを，もとの論文の出版社の許可を得たうえで本誌に載せることを義務づければ，本誌が再び学位論文掲載誌として厚さ1 cmになるのも夢ではありません．しかしそれには学位制度の変更が必要で，現在の14条特例入学者の研究時間の不足から考えると高いハードルかもしれません．

ともあれ，現在の本誌は，各教室の准教授講師クラスの研究者や，高安賞，十全医学会賞，修士課程優秀論文の受賞者等による総説を中心とし，これに研究紹介，学会見聞記，学会開催報告，留学報告などの記事を加え，ときに原著論文を掲載するというスタイルが定着しています．考えてみれば，かつての本誌は，ページ数が多くても中身を読むのは学位取得者本人と医局関係者のみという場合が多かったのではないでしょうか．現在の本誌は，金沢大学医学系各分野の最新の研究内容や学術活動状況を知ることができる情報紙として，会員に読まれる頻度はかえって高くなったのではないかと，都合よく考えています．同様な理由から，本誌の出版費用が学会予算のなかでかなりの額を占めるとしても，オンライン誌などにすればほとんど読まれなくなるでしょうから，冊子体にこだわってきました．

私が編集委員長になってから何ら抜本的な中身の改革を行わなかったことを正当化するようで恐縮ですが，私の考えを述べました．土屋新編集委員長のもと，今後新機軸が打ち出され，本誌がますます充実するならば嬉しいことだと思います．